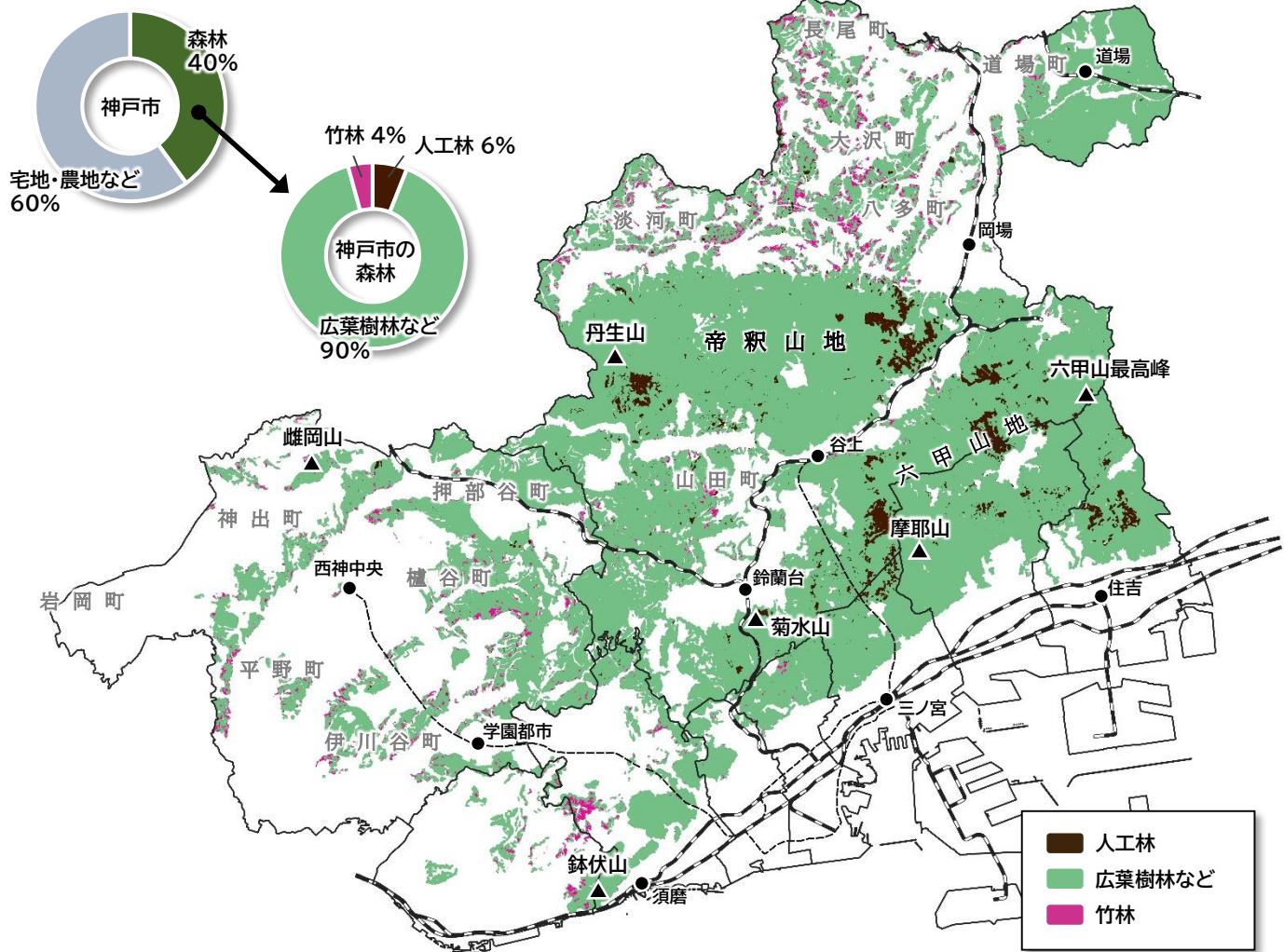


神戸の森林

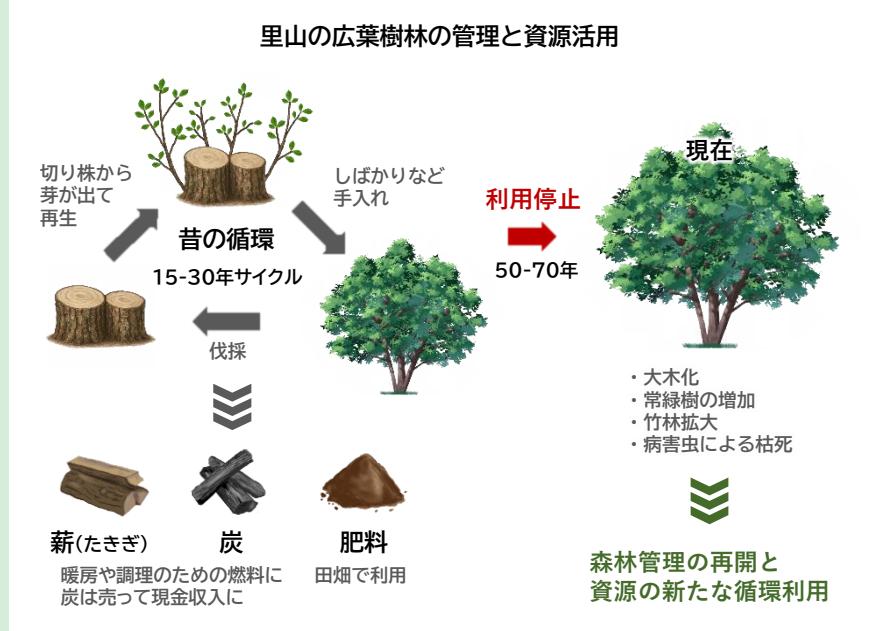
神戸市の約4割は森林です。海に面した市街地の背後に六甲山が存在し、北区や西区には里山が広がっています。森林に占める人工林の割合は約6%と小さく、広葉樹林などが90%を占めています。六甲山のブナ林や太山寺の照葉樹林のように、原生的な自然の面影を残す森もありますが、ほとんどは薪などの燃料を採取するために繰り返し管理されてきた林です。燃料としての需要がなくなった今、木々は大きく育ち、様々な課題を抱えています。森林に再び手を加えて適正な状態に維持するとともに、森林の資源を循環利用することで、持続可能な都市につなげていくことが求められています。



■ 里山の広葉樹林

燃料や肥料として利用するために繰り返し伐採されてきた林で、その歴史は千年以上に及びます。伐採後に切り株から再生する芽を育て、15~30年周期で伐採するという管理方法が用いられてきました。

1950年代以降、化石燃料や化学肥料の普及によって森林資源の需要は低下し、昔のような管理が行われている場所はほぼなくなりました。人の暮らしに合わせて成立していた生態系のバランスは崩れ、樹木の大木化や病害虫による枯死の増加など様々な変化が生じており、生物多様性の衰退や、倒木などによる生活への支障も生じています。



大きく育ちすぎた里山広葉樹林

一見すると緑豊かに見えますが、林の中は暗く、民家や道路への倒木や、農地の被陰なども課題となっています。



里山広葉樹の原木

最も多いコナラなどは、オーク材のような活用が可能。国産広葉樹の需要も高まっています。



里山広葉樹の活用例

カフェの家具として活用された例です。市内の公共・民間の施設における活用例は徐々に増えています。

■ 人工林

建築用の木材を収穫するために植えられたスギやヒノキの林で、六甲山の山上や北側斜面などにまとまった林があります。

北区有野町唐櫃には、所有者によって間伐や枝打ちが続けられてきた林があり、その伐採木は市内の各所で活用されています。

搬出利用が難しいことで間伐が進まず、林の中が暗いままで林床の植物が少くなり、土壌が流出したり、斜面の崩壊リスクが高まつたりしている場所も見られます。



適切に間伐された人工林



中央区文化センターでの活用

■ 竹林

竹は、建築資材や道具の材料、食材として重宝され、民家や農地のまわりに植えられました。しかし、利用量の減少などにより、森林や耕作地へ急速に拡大しています。拡大速度は市域で15ha/年にも及ぶと推測され、生活環境の維持や鳥獣被害の抑制、生物多様性保全などで大きな課題となっています。



竹林化が進む里山

